DEVIL SURVIVOR 君と共に

九頭龍隼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤＥＶＩＬ　ＳＵＲＶＩＶＯＲ　君と共に

【Ｎコード】
Ｎ２６２６Ｚ

【作者名】
九頭龍隼人

【あらすじ】
『長年の夢だった師範代になれた翌日、俺の生活は全てが変わってしまった』
幼少時から習い続けた流派で師範代に任命された日、数年前まで同居していた従兄のナオヤから「明日合わないか」と連絡が来る。懐かしい顔が目に浮かび、二つ返事で快諾する。しかし、それが俺と仲間たちの運命を変えることになる……

この小説はアトラス様より発売になっている、任天堂ＤＳソフト、

デビルサバイバーの二次創作作品です。独自解釈、独自設定が多々ありますが、これが苦手な方はご遠慮ください。

原作であるデビルサバイバーを知らなくても読めるように工夫しますが、原作をプレイしてから読まれた方が、より楽しめると思います。

PROLOGUE

――汝、人の身に生まれし者よ

――人は今や、力ある種。

――なれば人よ、汝は向き合わなくてはならない。

――己が持つ力と、運命に――

―渋谷　宮下公園―

『もしもし？』

『よお、ユズ、さっきナオヤさんからメールが来てさ、明日会わないかって』

『ナオヤさんって『彼』の従兄だよね？私も明日暇でさ……』

――平穏な日常に在りても、定めは刻々と迫り来り。

――其は裁きなり。

――かつて汝ら人の子の言葉を分かち、驕れる力を砕いたる雷なり――

――――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――

―六本木―

『はは……やっぱりダメだわ。ったく、『アヤ』さんは何だってワ

タシのこの歌を預けたんだか……』
『焦らなくていいさ。『歌こそは境界のない言葉』お前なりの歌い方で歌い上げりゃいい……』

――されど。

――神自ら在らざる限り、全ての物は闇をも抱く――

―六本木ヒルズ―

『これで『召喚の器』は完成しました……どうでしょう、このまま我々にお力をお貸し頂けませんか……？』
『……俺は何もしちゃいないさ。『原子の共通言語』が奴等を喚んだ……それに俺は『神』が苦手でね』

――人よ、真に己で在りたいならば、汝は自ら戦わなければならない

――汝の持てる闇……『悪魔』と――

――汝、戦の定めを負う者よ。挑む意志あれば、その名を述べよ――

「鷲尾龍也、お主の実力を認め、林崎神明夢想流師範代に命ずる」
「っは！謹んでお受けいたします！」

「レイ、なんとか師範代になれたよ……ってお前には師範代の意味はわからないか」
「コ～ン」
「はは、喜んでくれるのか？ありがとう……あれ、ナオヤからメールが来てる……明日合おうだって。レイ、久しぶりにナオヤと会えるみたいだよって、レイはナオヤに合うのは初めてか」

「コンコン」
「性格はそれほど良い奴じゃないけど、まあ悪い人じゃないよ。ちょっと変わってるけど」

――神曰く、七つの昼夜をもって創りしこの世を、七つのラッパの響きにて滅ぼさん。

――意志ある者よ、その瞳に映りし『数』を恐れよ

――残されし、その昼夜の数を――

PROLOGUE（後書き）

１２月１０日、修正しました

待ち合わせ

八月中旬、高校二年の夏休みが終わろうとしている。

「暑いね、レイ」

「ク～ン」

一人の少年と一匹の狐がそんな会話をしている。

少年の方は大きなヘッドフォンをつけて（何故か針金のようなものがネコミミ状になっている）おり、青い髪に中性的に整った顔、二の腕までの長さしかない半端な服を着ており、その足元には小さな子狐が一匹、少年の靴の上に腰かけていた。

彼らの名前は鷲尾龍也と雌の子狐のレイ。何処にでもいるごく普通の高校生だ。

何、大都会東京で狐連れてネコミミヘッドフォン付けてる奴を普通の高校生とは言わないって？ハッハッハ、御冗談を。

確かに彼は林崎神明夢想流の師範代と言う、高校生にしてはあり得ない立場の持ち主だが、剣術の腕前と格好を除けばごくごくありふれた普通の高校生だ。

あち～と言いながら周りを見渡すと、既に帰省の始まった渋谷の街は、何時もより人が少なく見える。まあ、特に人が減ったとか、そんな事は無いのだが……

さて、夏休みで高校生……と言えば何が思い出されるだろうか？

ひと夏の思い出、キャンプ、友達と行く海……楽しい事が沢山のように見えるが、実は高校生……いや、学生には忘れてはいけない忌々しい存在が一つだけある。そう、その名も『宿題』だ。これまで何人もの学生が宿題を『まだ日にちがあるからいいや！』と放置し、夏休み終盤に家に缶詰め状態になった事だろうか。（ちなみに作者は宿題をもらったら学校で終わらせていた人です）夏休みの中盤と言えばお盆が重なり、暇な時間を過ごしている学生も多く、そ

の期間に宿題を終わらせる学生が多くなる。が、この少年鷲尾龍也はつい昨日まで道場の夏季合宿で宿題の『し』の字さえも終わっていなかった。

「なあミク、どうして東京ってこんなに暑いんだろうね」

龍也は額に滲んだ汗をポケットに入れていた青いハンカチで拭きながら（昔甲子園で某王子が使っていたハンカチではない）足元のミクに尋ねるが、彼女はわからないらしく、首を傾げて龍也の方を見上げていた。

このアホみたいに暑い中、どうして一人と一匹は外に突っ立っているのかと言うと、数年前まで龍也と同居していたナオヤと言う青年が『久しぶりに会えないか？』と、ほざきやがったからである。しかし、この暑いのに外で直射日光に当たっているのは自分離れているから良いとして、レイの体に良くないんじゃないかと考えた心優しい龍也君は、少しでも彼女が涼しくなればいいと、近くのコンビニで氷とミネラルウォーターを購入し、持ち歩いていた彼女専用の水飲み皿に入れ、自分の影で日陰を作り、その中に彼女を入れてあげているのだ。が、それでも都会の暑い空気は変わらず、彼女は体を暑いコンクリートにグテ～っと横たわらせていた。

「お～い龍也！こっちこっち！！」

そろそろやばいな、と龍也がコンビニか何処かへの逃走を図ろうとした直後、聞きなれた親友の声が聞こえてきた。

彼の者の名前は木原篤者（アツジャ）もとい木原篤郎＝（通称）アツロウ。龍也の親友兼クラスメイト。電子機器に強く、彼が愛用のノートＰＣを手放す事は殆どない（学校にも持って来て先生方に呆れられたのは余談だ）

「龍也にレイもお疲れ～いやはや、ナオヤさんも奇特だよなぁ、こんな暑い日に何も外で待ち合わせなんてしなくてもいいのに」

「全くだね。俺は稽古で慣れてるから良いけど、レイは暑くてほれ、グデ～としてるだろ？」

「まあ、俺から言わせて貰えば何でこんな時までレイを連れて来

てるんだって事になるんだけど……学校でも一緒なお前達には普通の事か」
アツロウが学校にノートPCを持ち込むなら、龍也は学校にもレイを連れていくという、ある意味問題児な二人なのだ。
「それで、どうよ夏休みは……って昨日まで合宿だったんだもんな。学校だと毎日顔合わしてるからすげー久しぶりな気もするけど……元気だったか？」
「元気だったよ。合宿逝ってたから何とも言えないけどね」
「お～、流石は龍也。字が違うような気がするけどそこはスル～推奨？」
「推奨」
「ならスルーする。俺なんかやる事無くて家でずっとパソコン叩いてるよ。」
はっはっは！と笑うアツロウを、地面でグデ～としていたレイが冷たい目で見ている。
「レイちゃん、そんな目で俺を見ないで……ごみを見るような眼で見ないで……」
「違うぞアツロウ、この目はダニを見る目だ」
「なお悪いわ！！」
今までの会話を聞いていてもわかるとおり、龍也とアツロウは非常に仲がいい。アツロウにはミクもよく懐いており、時折二人と一匹で遊ぶ事もある。
「いや～、でも良かったよ」
「ん、何が？」
「丁度プログラミングでわからない所があってさ。もう困っちゃって、丁度ナオヤさんに聞こうと……」
「あ～いたいたっ！探したよ～！」
アツロウのパソコンヲタク丸出しの発言は、二人と一匹に馴染みのある声で遮られた。
「おっ、来たなソデコ！」

二人と一匹のが声のした方向を見ると、赤髪で全身をピンクのコーディネートでばっちり決めた青いスカートの女の子が走ってくるのが見えた。
「ソデコってゆ～な！私は柚子！もうっ、いい加減その呼び方やめてよね。あんたのせいでクラスの男子にまでソデコって呼ばれるんだから！」
「へへっ、い～じゃんか！袖子と柚子って字面そっくりじゃん。それに生徒だけじゃねえし。今も真顔で『ソデコ』って間違える先生、割といるぜ？」
「それはアンタみたいなのが『ソデコ』って呼び倒してるからでしょ！」
「ははは、バレたか！」
「はい、二人ともストップな。レイが怖がるだろうに」
この男、レイ至上主義である。
「だってアツロウがソデコってゆーんだもん……」
シュン……としてしまうユズ。これが美少女がやるもんだから結構可愛い。
「うむ、その点についてはアツロウが悪い。後で帰ったら尻木刀30回の刑に処す」
「げげ、それは勘弁」
ちなみに龍也はクラスの男子で唯一ユズの事をソデコと呼ばない人物である。そのせいでユズ×龍也が鉄板だという噂が彼等の学校では流れている。ちなみに、アツロウ×龍也も少数派ではあるがいるらしい。本人達が知ったら怒髪天を衝く勢いで犯人探しを始めるだろうから、その主な原因は話さない事にする。
「にしてもナオヤ来ないな……さっさと涼しい所に行って休みたいんだが……」
「え……？あ、そうだ！」
「ん、どうした、ユズ？」
「さっきナオヤさんにあって、急用で来れないからって龍也とア

ツロウに届け物頼まれたの」
「え～、ナオヤさん来れないの？せっかく楽しみにしてたのに……で、届け物って何？」
ＰＣ関連か？それとも暗号化なんかかな？と、一人盛り上がるアツロウを無視し、ユズは鞄から何かをとりだした。
「はい、コレ。も～、鞄重くなっちゃって大変だったんだから」
「ゲーム機……ナオヤがこれを？」
高校生三人にゲーム機のプレゼントとは、ブルジョアめ！
「うん、そうだよ？コミュニケーション・プレイヤーってヤツだよねコレ？ＣＭでみたことあるよ『世界の人と遊ぼう！』ってヤツ」
「ああ、夏休み前にアツロウが学校に持ってきて流石に没収された奴だっけ？」
「うげ、嫌なこと思い出させるなよなぁ……買ったばっかりで一週間没収とか洒落にならないって……まあ、これはソデコも知ってる通りコミュニケーション・プレイヤーだけど呼びにくいだろ？だから略して『ＣＯＭＰ』って呼ばれてる。実際便利だぜ、メールとかブラウザ機能とかあるし、ゲーム機って言うより進化した携帯って感じかな」
「ふぅん、そういうもんなの？ナオヤさんがね『君達に必要なものだ、手放すな』って」
「君達……ああ、だから三台あるのね……でもさ、何で必要なんだ？ＣＯＭＰなら家に行けば……ん？」
アツロウは手に取ったＣＯＭＰを開いて、怪訝そうな声を上げた。
「どうした？」
「何だ……これ？こんなトップメニュー見た事ねえぞ……オリジナルって可能性が高いけど……」
「オリジナルって……自分で作ったって事？そんなこと出来るの？」
「あれ、ソデコ知らね～んだっけ？ナオヤさんはその筋じゃ有名な天才プログラマーなんだ。こんなモン、作ろうと思えば朝飯前っ

て奴だよ」
「へえ、知らなかった……ナオヤさんってそんなに凄い人だったんだ……」
「まあな……おっと、フォルダ開かねえや。プロテクトでもかかってんのかな……」
「プロテクト？それって他の人に勝手にいじられないようにするヤツでしょ？じゃあ中身は見られないじゃない」
「まあ、普通ならそうだけど、アツロウなら大丈夫だろ」
龍也の言葉を聞き、待ってましたとばかりに背中の鞄からノートPCを取り出すアツロウ。
「へへ、それじゃ龍也の期待にこたえますかね。やっぱノートPC持って来て良かった～」
ノートPCにCOMPをつなぎ、カタカタと何かを入力し始めた。
「はぁ！？ちょ、ちょっとアツロウ！何やってんの！？」
「何って、ハッキングしてフォルダこじ開けるんだよ」
「こじ開けるって……ナオヤさんに怒られちゃうよ？」
「別に良いんじゃね？プロテクトかけたって事はアツロウに『こじ開けてみろ！』って言ってるんだろ……任せたぜ、パソコンヲタク！」
「龍也、俺にやる気出させたいのか落としたいんだかはっきりしてくれよ……まあ、竜也が言った通り、師匠から弟子への挨拶代わりみたいなもんさ」
「ぜ～んぜんわかんない。何そのめんどくさい師弟関係……」
呆れるユズを無視してキーボードをたたき続けるアツロウ。そして数分後……
「おっしゃ、開いたぜ。さてと、今回はどんなプログラム何でしょうかっと……にっひっひ♪ワクワクするよな」
「し・ま・せ・ん！そんなのアツロウだけです！」
「とりあえずメールだけ見られるみたいだぜ。ほれ、お前らの分」
「サンキュ～アツロウ。お前に上級パソコンヲタクの称号をやろ

う」
「いや、いらないから。何その名誉なのか不名誉なのかよくわからない称号」
などと戯言を吐き続けるアツロウを無視してＣＯＭＰを開くと、一通のメールが着信していた。

ＦＲＯＭ　　時の観測者
ＳＵＢＪＥＣＴ　ラプラスメール

おはようございます。
本日のニュースをお伝えしマす。

?１６時頃　渋谷区青山アパートにて男性が【死亡】肉食獣に喰い荒されたような跡

?１９時頃　港区青山、青山霊園にて大きな【爆発】原因は不明

?２１時頃　東京全域にて大規模な停電

みなさま良い一日ヲ。

……悪戯……いや、ナオヤに限ってそんな無意味な事はしないよな……
「１６時頃、渋谷区青山、男性が……死亡！？肉食獣に喰い荒された……！？何のニュース、これ……気味悪い……」
「……ところどころにカナが書いてあるな」
「ちょっと、ツッコム所違うでしょ！？」
「……まあ、さっきのは冗談としても、流石に気色悪いな……」
「東京全域で停電とかも書いてあったよな……何だろこれ。本日のニュースって言っても今日はこんな事起こってねーし……ナオヤ

さん、どうしてこんなファイルにプロテクトかけたんだ？」
三人とも意味が分からないようだ。
「もしかして暗号とか！？青山……そうだ！青山と言えばナオヤさんのアパートもそのあたりだったけど……関係ないか」
「もう良いよ、気色悪いってば！ナオヤさん、アツロウが必ずＣＯＭＰいじるの知ってて悪戯したんじゃないの？」
両手で自分の腕をさするユズ。ホントに気色悪いのな。
「どうかなぁ……あの人尋常じゃなく頭いいからさ、何か意図があると思うんだけど……」
「……こーゆー事に関しては俺よりアツロウの方がナオヤについて知ってるよな……俺、パソコンについてはさっぱりだから」
アツロウは自分の尻尾を追いかける犬のように数分の間その場をぐるぐる回っていたが、やがて止まって鞄にＣＯＭＰとノートＰＣをしまいだした。
「とりあえず考えてても始まらないから他のプロテクトもこじ開けてみるわ。俺は落ち着ける所に移動するから、二人はちょっと二時間位時間潰してきてくれ」
「了解。で、他のＣＯＭＰはどうする？」
「ああ、持っていっていいぜ。いくつかの機能は使えるはずだから、ついでに試してみてくれよ。じゃあ、後でな！」
アツロウはユズに何かを耳打ちしてから走り去って行った。
ユズを見ると、顔を真っ赤にしてアタフタしていた。
「アツロウは何だって？」
「べ、別に何でもないよ！で、でもさ、どうせ悪戯なのにアツロウってこういう話になると子供みたいだよね」
「ま、十分今でも子供だけどな……」
「ははは、そうだね……ん～っと、どうする？アツロウも時間かかりそうだし、何処かに行って来ようか、ね！」
「ん……そうだな。レイ、おいで」
龍也はレイが自分の鞄の中に入ったのを確認し、ユズと共に渋谷

９０１前を離れるのだった。

ユズとデート？

―新宿　歌舞伎町――――――――――――――――――――――――――――――

日本最大の繁華街であるこの街は、今日も相変わらずの賑わいを見せていた。

「さてと……何処行こうか？カラオケとか映画？う〜ん、アツロウから連絡来るかもしれないからケータイの通じる所が良いよね」

「そうだね……でもユズさんや、どうしてこの暑いのにそんなにテンション高いのかね？」

「だって久しぶりに龍也に会えたんだもん。楽しまなきゃ損でしょ」

「ふ〜ん、そーゆーもんかね」

ユズは少し顔を赤くしながら、自分がどれ程龍也を思っているのか、含みを持たせた言い方をする。が、我等の主人公はその程度の含みを持たせた言葉では相手が自分にどんな思いを寄せているのかなんて読みとる事は出来ず、あち〜あち〜と連発しながらまわりをキョロキョロと見わたすだけだった。

「……馬鹿」

「ん？何か言ったか？」

「ううん、別に」

「そうかい……お、ちょっとユズ、あれ見てみろよ」

「え？」

龍也が指差した方向には、奇妙な衣装（橙色の長いコートフード付き）を着た、見るからに怪しげな集団が陣取って、集団の代表らしき人物が壇上で演説を行っていた。

「……で、あるからして、かつてバベルの塔の建設を阻んだ神の

知れんが、今、再び訪れようとしています！」
バベルの塔……確かそんなの出て来る歌なかったっけ……？
「うっわ……何、あの怪しい集団……？」
「宗教団体なんてそんなもんだろ。バベルの塔か……そんな歌なかったっけ？……そうだ！『バベルの塔～に住んでいるちょ～の～りょくしょ～ねんバビル～に～せい～』こんな歌だよ！……って、こりゃバビル二世か」
「……ごめん、全くわからない」
「ええっ！」
「いや、マス〇さん風に驚かれても、知らないのは知らないって……」
俺の時代が古いのか……？と考え込む龍也の耳に、さっきの教祖っぽいのの演説が耳に入って来た。
「さあ、みなさん！我々翔門会と共にネットの世界で世界を再び一つにまとめ……」

「ネットの力だってさ。確かにネットで世界中の人と繋がれるって言うのは凄いと思うけど……はぁもう、何か疲れちゃうよ。龍也は、ああいうの興味ある？」
「全く無いね。俺からすれば形のない神やら仏やらに頼って生きて行くって考えが理解出来ないからさ……結局、ああゆうのに心酔できるのは自分に自信の持てない『愚者』だけだよ」
二人の間に沈黙が訪れる。
「……あ～あ、なんか変な話になっちゃった。龍也、場所変えよ！！」
「そうだね、あれを見てると色々考えちゃうから」
神様なんてそんな存在はいる訳が無い。神がいて、全員に救いを与えてくれるのなら、酷い飢餓で苦しむ人も出る訳が無いし、格差なんてものが出来るはずもない。歴史を見れば神を信じた奴の末路は殆どが悲惨なモノだ。

結果、神などいない。そして形のない『モノ』には頼らない。
それが鷲尾龍也の考え方だった。

「今夜から三日間、ネットの力を信じ、同じ志をもつ人々が、東京に集います。心ある型は参加して下さい。主上を信じ、試練に正しく備えて下さい。その時こそ我々は……！」

去り際に龍也の耳に聞こえた戯言に、彼の機嫌は非常に悪くなるのだった。

――表参道――――――――――――――――――――
――――――――――――

歌舞伎町で見かけた愚者（龍也談）達によって悪くなった龍也の機嫌を直す為、龍也とユズ、レイの二人と一匹は表参道でウィンドウショッピングを楽しんで？いた。

「やっぱりこの辺のお店っておしゃれよね〜。何て言うか、大人っぽい？中学生のころは原宿ばっかり行ってたけどやっぱりいつかは表参道の似合う女になりたかったんだよね」

「俺は中学の時から道場ばっかだったからそんな事考えなかったよ」

苦笑しながら言う龍也に「あははははは……」と苦笑を返すユズ。傍から見れば二人は付き合い始めたばかりで相手の事をもっと良く知りたいと思うカップルに見えなくもない。こんな事を言うとユズが顔を真っ赤にして再起動まで時間がかかるから言わないが……

「そんなことより……ね、今の私浮いてないかな？」

「浮いてるも何も、雰囲気にジャストフィットしてるよ」

「え、うそ！やった、嬉しい！」

少々からかいを含みながら返した台詞だったのだが、よほどほめられたのが嬉しかったのか、ユズは顔を少し赤くして両手で頬を抑

えた。
　そんなユズをコロコロ表情が変わって実に女子高生らしい。と、冷静に分析してるのだから、鷲尾龍也という男、女性の扱いに手慣れている。
「手慣れてねえよ」
「え、どうしたのいきなり？」
「いや……何か不名誉な事言われた気がしたんだが……」
「？まあいいや。でもさ、表参道と原宿って全然イメージ違うじゃない？なんかさ、原宿って言うより青山に近いイメージが……」
　青山ねえ……最近その名前をどこかで聞いたような……！！
「……ねえ、龍也、今って何時だっけ……？」
「……１６時３０分……あのメールの時間だよな……」
　ユズも同じことを考えていたようで、二人揃ってお通夜のような雰囲気になってしまう。
「……龍也も同じ事考えてた？」
「……ああ」
「やっぱり……あの『肉食獣に喰い荒された』ってメール……確か場所も青山だったでしょ？丁度時間も今頃だし……」
「……考えすぎでしょ。そんな未来予知のメールなんて……まだ空歩けたり透明人間になれるって方が現実的でしょ」
　龍也がその台詞を呟いた途端、二人の目の前をサイレンを鳴らしたパンダカーが通り過ぎて行った。
『……』
　二人の間に、またしても沈黙が訪れる。
「あの方向……青山の方だよね……？」
「まあ待て、ここは落ち着いて素数を数えるんだ……」
「龍也、私は真面目に聞いてるんだけど……？」
「す、すいません！！」
　顔には天使のような笑みを浮かべながらも、目は笑っていない。
　余談ではあるが、後日龍也は表参道で青山方面にパトカーが走っ

て行った原因よりもユズの方が怖かった。と語っている。
「ねえ、ナオヤさんのアパート、青山なんだよね……？見に行かなくても……大丈夫かな？」
少し前まで顔一面に笑顔を浮かべていたユズの顔が、得体のしれない『モノ』への恐怖に彩られているのを見て、何かあった時は俺がアツロウとユズを守る。と、決心を固める龍也であった。
「……行ってみるか？」
「う、うん……ちょっと怖いけど、大丈夫」
そうして二人は、覚悟を決めて青山のナオヤのアパートに向かうのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2626z/

DEVIL SURVIVOR 君と共に

2011年12月11日22時47分発行